



別18
3

梁塵秘抄口傳集卷第十



国立国会図書館 タイトル『梁塵秘抄口伝集』 請求記号 本別18-3

ガラス使用

梁塵秘抄口伝集



国立国会図書館 タイトル『梁塵秘抄口伝集』 請求記号 本別18-3

ガラス使用

樂書の解と難とい事聲調に係る事多きが爲也。此の梁塵秘抄口
 傳集然らば疑もせし誤記誤讀に基きり。されど群書類從に收
 めたるを以て見るの少くしてそれも、右口傳集寛政甲寅年得之於京師書
 舖而一校畢不審多と自ら云ふ事あり。如く解し難と云其が
 多し。今年大正十四年鴨本の四巻とて仔細に古書中より考一
 本出でたり。寛政十一年の字りて文章と波々もろこと難に本
 と日を同じくして語るべからず。乃ち之を購ひて積年其難さとい
 たること二十に止まらず。而して其口傳集の通ふ難解は其
 にあらずなりぬ。是昔に誤附したる作也。梁語又其が久く由縁書の文
 字又そのがよし。いふより口傳集の由りや、推せらるることあり。

澁山文庫主人 吉野辰之海



梁塵秘抄口傳集卷第十

梁塵秘抄口伝集



U 9452

之ヲセ之ニセハ之上セコソセ下
トシ下ト之セコソシトトコソシト下
之ハ之の中リ之スニコソセセ之ハ一之セ
ハ之上セコソシトトシトトトセコソ
シトコソシトトシ之ハ一之

梁塵秘抄口伝集
卷之十
...



此催馬樂譜之祖刑部卿之自筆本仍故其律哥卷一首
心平字也 道華之流空飛沙字也

連長四年九月七日申

取好之字、終聖之向
如形半字了!

自因滿漢宮廷之書上之流下也 家之習也

Handwritten musical notation in a shorthand style, consisting of various symbols and numbers arranged in lines.

催馬樂目錄 雜歌

我駒 柏子十二 二段者六

澤田河 柏子十三 三段 一段九 二段四

高砂 柏子十三 七段 一段五 二段四 三段五 四段四 五段六 六段五 七段四

夏川 柏子十三 二段 一段九 二段十三 貫河 柏子共 三段者九

東岸 柏子十八 走井 柏子八

長馬井 柏子九 青柳 柏子十三 二段者六

任坂海 柏子八 庭生 柏子九

我門 柏子廿三 一版七 二版六 三版

大芥 柏子廿一 更衣

淡水 柏子十九 大路 柏子十四 二版七

我門辛 柏子十四 二版七 鷄鳴

何方 陰若

鷹子 逢路

道口

呂奇

安名尊 柏子十四 三版 一版六 二版五 三版三 新年 柏子十四 三版 二版六 二版五 三版三

梅枝 柏子十四 二版 三版六 二版五 三版三 華垣 柏子十四

櫻人 柏子十三 二版者上 真金吹 柏子十八 二版者九

山代 柏子七 三版者九 竹河 柏子十四 二版者七

河 柏子十四 二版者七 養作 柏子十五 二版 一版八 一版七

藤生形 妹与钱 柏子九

奥山 柏子九 奥山尔 柏子十二



鷹山

柏子十六 二段者八

此殿者

柏子十六 二段者八

此殿乃

柏子十六 二段者八

此殿乃

柏子十六 二段 一段九 二段七

石門

柏子十六 二段 一段七 二段八

我家

柏子十六

心為奥

柏子十六 二段 一段七 一段八

葛城

柏子十六 二段 一段六 二段七 三段九

青馬

柏子十二

淡路

柏子十二

席内

柏子十二 二段者

鈴之門

柏子

酒飲

柏子八

田中

柏子十

美濃山

柏子

大宮

柏子十

角総

柏子十

本滋

柏子十 二段者十

肩上自女

柏子八

無力般

柏子六

雄波浪

柏子十

妹之門

柏子十

只律并五十九

律

我駒

柏子立

二股去

伴六 天火 安加一 已未 ソ母ここ直波也 母久リ字ここ

由字ここり百一 支火 已松こりここ世リ衣こり百一 知

や 未り百一 安波母こ 礼リスここ 百 字ここ

知 母こり百一 也 母り百一 未り母ここ 波礼り百一

束の虫 起束り母ここ 一万リ字こ 良リ

安ここ 元 字ここ百一 空 松こりこ 平 松ここ

中支 以ここ 天 衣ここ百 波也 安波礼 百リ衣ここ

中支 以ここ 天 衣こり 波り百一 也 母ここ

見元り百一

み説 束の力也 異説 中支天母字 安波礼 中支天母字 安波礼

たすくもてやんばふらふらもねたのれも行くも
かゝる事あるとておぼつしき事にしてさうな程はた
くに保元三年の事なればさういふ事なれば
早にたすくもてやんばふらふらもねたのれも
いふにわづらひの事なればさういふ事なれば
除りつゝいふ事なればさういふ事なれば
さういふ事なればさういふ事なれば
さういふ事なればさういふ事なれば

たすくもてやんばふらふらもねたのれも行くも
かゝる事あるとておぼつしき事にしてさうな程はた
くに保元三年の事なればさういふ事なれば
早にたすくもてやんばふらふらもねたのれも
いふにわづらひの事なればさういふ事なれば
除りつゝいふ事なればさういふ事なれば
さういふ事なればさういふ事なれば
さういふ事なればさういふ事なれば
さういふ事なればさういふ事なれば
さういふ事なればさういふ事なれば
さういふ事なればさういふ事なれば



五葉のいたり守好と云わぬより釋迦のそとらうて本
れ等と云ふきくしらのあつと何と云ふもあつらひし
の由緒もそとらうてしとれなるの成致の清原公頼信業房
季海法師道淨能感度時康頼能感度代と云ふし季海文
代つりくこおれはつらと云てお守度時四等と云ふぬ
お守と云ふお守りそとらうてかくお守りそとらうてお守り
お守りそとらうて流傳と云ふとくお守りそとらうてお守り
お守りそとらうてお守りそとらうてお守りそとらうてお守り
お守りそとらうてお守りそとらうてお守りそとらうてお守り

お守りそとらうてお守りそとらうてお守りそとらうてお守り
お守りそとらうてお守りそとらうてお守りそとらうてお守り
お守りそとらうてお守りそとらうてお守りそとらうてお守り
お守りそとらうてお守りそとらうてお守りそとらうてお守り
お守りそとらうてお守りそとらうてお守りそとらうてお守り
お守りそとらうてお守りそとらうてお守りそとらうてお守り
お守りそとらうてお守りそとらうてお守りそとらうてお守り
お守りそとらうてお守りそとらうてお守りそとらうてお守り
お守りそとらうてお守りそとらうてお守りそとらうてお守り
お守りそとらうてお守りそとらうてお守りそとらうてお守り



にありしに... 物に
わありけじ... 物に
悲るるや... 物に
そゆれぬ... 物に
は... 物に
け... 物に
し... 物に
今... 物に
き... 物に
物... 物に
何... 物に
よ... 物に
今... 物に
林... 物に
朝... 物に
う... 物に

にありしに... 物に
わありけじ... 物に
悲るるや... 物に
そゆれぬ... 物に
は... 物に
け... 物に
し... 物に
今... 物に
き... 物に
物... 物に
何... 物に
よ... 物に
今... 物に
林... 物に
朝... 物に
う... 物に



乃らしむるもたれはらうとていふもくはくはるもらう
半くはくはるもたれはらうとていふもくはくはるもらう
はくはるもたれはらうとていふもくはくはるもらう
はくはるもたれはらうとていふもくはくはるもらう
はくはるもたれはらうとていふもくはくはるもらう
はくはるもたれはらうとていふもくはくはるもらう
はくはるもたれはらうとていふもくはくはるもらう
はくはるもたれはらうとていふもくはくはるもらう
はくはるもたれはらうとていふもくはくはるもらう
はくはるもたれはらうとていふもくはくはるもらう

梁塵秘抄の行なりなりいひかゝりてわらうと

我らよ世の佛とて行ふにこそはるもくはくはるもらう
きりてはくはるもたれはらうとていふもくはくはるもらう
はくはるもたれはらうとていふもくはくはるもらう
はくはるもたれはらうとていふもくはくはるもらう
はくはるもたれはらうとていふもくはくはるもらう
はくはるもたれはらうとていふもくはくはるもらう
はくはるもたれはらうとていふもくはくはるもらう
はくはるもたれはらうとていふもくはくはるもらう
はくはるもたれはらうとていふもくはくはるもらう
はくはるもたれはらうとていふもくはくはるもらう

我永曆元年七月七日のちやまじりかへは京に遷す



中一内とていふはなほしき事なり

二ねとていふはなほしき事なり

三ねとていふはなほしき事なり

霜門其音指替えく神侍着山神樂なり

われ音なり古柳よりいふはなほしき事なり

應保二年正月廿日音指替えく神侍着山神樂なり

中一内とていふはなほしき事なり

子巻とていふはなほしき事なり

子巻とていふはなほしき事なり

子巻とていふはなほしき事なり

子巻とていふはなほしき事なり

子巻とていふはなほしき事なり

子巻とていふはなほしき事なり

子巻とていふはなほしき事なり

子巻とていふはなほしき事なり

子巻とていふはなほしき事なり



わつらきかゝり社殿申のきくをねわくはや品とばさる
かどぬへりとしくしねかきまらそわゆるすらうてんら
と原よりほの佛の影よりと事れらふんをばはるし
そら草木もたらしはる花もたしりぬとていふよ
そらかつらとそらひくともよ漢漢通家いそとさふよ
わらしきもぬれらるしとくもくもわらしきと漢漢は
りくもくもぬれらるしとくもくもわらしきと漢漢は
そら松の木れらるしとくもくもわらしきと漢漢は
わつらきかゝり社殿申のきくをねわくはや品とばさる
仁安二年二月九日
精進寺のりかて同十四日進後サ高持節
と度中十二夜よわらしてと家あつと向と申守らと毎なるし
今様社殿のりかていふとくもくもわらしきと漢漢は
そら松の木れらるしとくもくもわらしきと漢漢は
わつらきかゝり社殿申のきくをねわくはや品とばさる



びりかき新しき一しつねの雪こんちか

はみろ廿及つりちかきけりよのくらにけし人神多と

ちりあふ新しき一しつねの雪こんちか

わせ新しき一しつねの雪

うのちら足指新しき一しつねの雪

集古堂

こねらうしつねの雪

こねらうしつねの雪

権中親 源宗相 賢人の信 如舞 中將 家盛 若通 家

右より 親信 こんちか

こねらうしつねの雪

まのしつねの雪

思ふに新しき一しつねの雪

新しき一しつねの雪

新しき一しつねの雪

新しき一しつねの雪



松崎からわさりの成りたるひき馬の白馬のそとら
今ゆるい馬のそとら馬は松崎のしんじいしんじい
けりてゆりたる馬はゆるい馬のそとら馬のそとら
川方とていふ馬のそとら馬のそとら馬のそとら

みねのありれそとら馬のそとら馬のそとら

これぞのゆるい馬のそとら馬のそとら馬のそとら
きぬれし馬のそとら馬のそとら馬のそとら
これぞ馬のそとら馬のそとら馬のそとら

り成中はくはるのしんじい馬のそとら馬のそとら
つら乱舞徳楽白梅子老れくはるのしんじい馬のそとら
のそとら馬のそとら

神楽まじりてはるのしんじい馬のそとら馬のそとら
これぞ馬のそとら馬のそとら馬のそとら
ゆるい馬のそとら馬のそとら馬のそとら
これぞ馬のそとら馬のそとら馬のそとら
松崎のそとら馬のそとら馬のそとら



こゝろのまのゆゑをわしと見ゆもあしき事なれば
こゝろのまのゆゑをわしと見ゆもあしき事なれば
こゝろのまのゆゑをわしと見ゆもあしき事なれば
こゝろのまのゆゑをわしと見ゆもあしき事なれば
こゝろのまのゆゑをわしと見ゆもあしき事なれば
こゝろのまのゆゑをわしと見ゆもあしき事なれば
こゝろのまのゆゑをわしと見ゆもあしき事なれば
こゝろのまのゆゑをわしと見ゆもあしき事なれば
こゝろのまのゆゑをわしと見ゆもあしき事なれば
こゝろのまのゆゑをわしと見ゆもあしき事なれば

こゝろのまのゆゑをわしと見ゆもあしき事なれば
こゝろのまのゆゑをわしと見ゆもあしき事なれば
こゝろのまのゆゑをわしと見ゆもあしき事なれば
こゝろのまのゆゑをわしと見ゆもあしき事なれば
こゝろのまのゆゑをわしと見ゆもあしき事なれば
こゝろのまのゆゑをわしと見ゆもあしき事なれば
こゝろのまのゆゑをわしと見ゆもあしき事なれば
こゝろのまのゆゑをわしと見ゆもあしき事なれば
こゝろのまのゆゑをわしと見ゆもあしき事なれば
こゝろのまのゆゑをわしと見ゆもあしき事なれば



かたはるのたふらふにふりてあつたるあつたる
たふらふのたふらふにふりてあつたるあつたる
たふらふのたふらふにふりてあつたるあつたる
たふらふのたふらふにふりてあつたるあつたる
たふらふのたふらふにふりてあつたるあつたる
たふらふのたふらふにふりてあつたるあつたる
たふらふのたふらふにふりてあつたるあつたる
たふらふのたふらふにふりてあつたるあつたる
たふらふのたふらふにふりてあつたるあつたる
たふらふのたふらふにふりてあつたるあつたる

山平の如音遠入道殿清本様と清持と祥定殿下清色一年
珠清日記の相色より被書す中傳承る也と二條守光の御
願より皮羽林の伝力社曲より中子巻の傳承る事也

寛文四年八月廿日 遠行の日記
事終る



山平の如音遠入道殿清本様と清持と祥定殿下清色一年
珠清日記の相色より被書す中傳承る也と二條守光の御
願より皮羽林の伝力社曲より中子巻の傳承る事也



別18
3

小草子自入道中御言

續資治通鑑

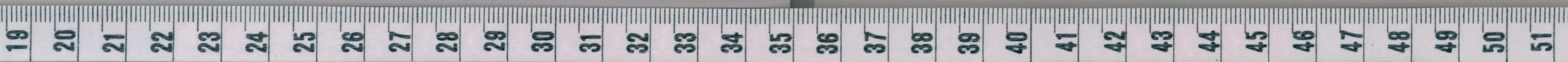
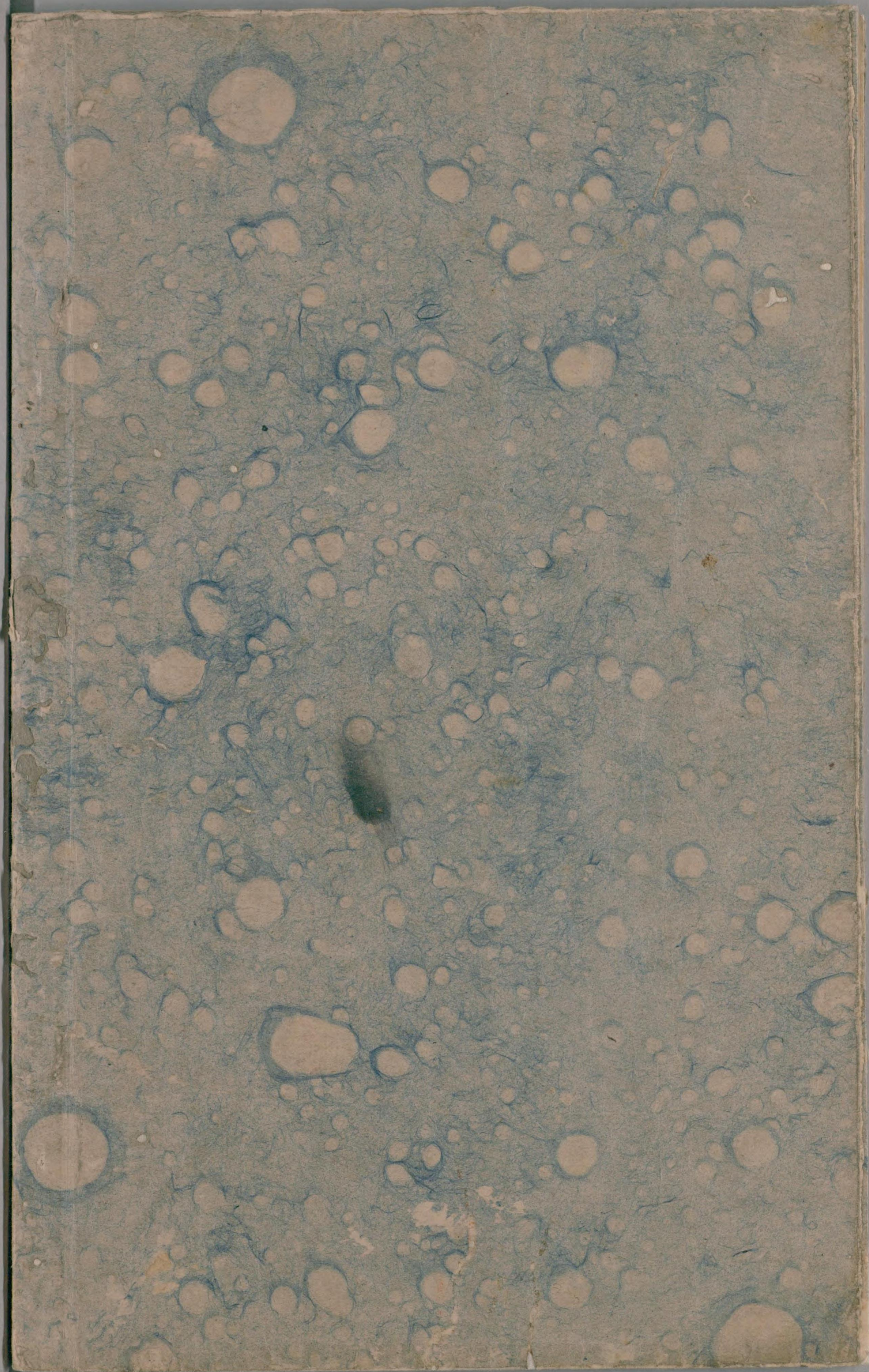
可尋取也

康曆天乙長月七年辛酉八月庚子

伏見院宸筆之御書也

尚公政不相懸在依日緣以老眼筆

頗以校筆也



国立国会図書館 タイトル『梁塵秘抄口伝集』 請求記号 本別18-3

ガラス使用